

学びて、未だ至らず

斎藤 徹

この度、記念誌発行のための執筆依頼があり、同窓四名の誰が書くかのやりとりがあって、貧乏くじを引いた斎藤（正直、余り気が進まなかった）が、来年度の入試問題の作成に四苦八苦しながら原稿用紙に向かうこととなりました。

取り合えず、市大地理学教室五十周年おめでとうございます。わずか二年の在籍で教室を去った同窓諸君の胸中を推し量ることは到底できませんが、三十余年の時を経て「おめでとう」と声を揃えて云える心境に達しているのではないかと思います。

さて、いささかの回想談となりますが、相当昔のことでもあり記憶もおぼつかなく、執筆者自身真面目な学生の部類に属していなかったのも、うろ覚えの支離滅裂な内容になることをお許しください。板野哲夫君（阪大より学士入学）・仲谷秀雄君・福西康至君ら真面目な同窓生諸君に申し訳ありません。まずもってお許しを願います。

当時の恩師であった村松主任教授・藪内教授・渡辺教授はすでに他界され、お悔やみを申し上げるしかありません。ドイツ仕込みの学者然とした村松先生、ダブルの上着に瘦身を包んだ温厚な紳士風の渡辺先生、南太平洋の太陽と海風の匂いを漂わせていた藪内先生—地理学会の第一線で活躍されていた諸先生の熱心なご指導にむくえないまま飛び立った我々を天上からどんなお気持ちで眺めていらっしゃるのでしょうか。



昭和40年 地理研 巡研

助教授の岩田先生・春日先生はそれぞれのご研究に没頭されていた年代で、今思えば我々の指導に手間暇かける時間も惜しかったのではなかったろうかと推察する次第です。そして、最も我々の年齢に近く、兄貴分のように親しく世話を焼いていただいたのが当時助手をされていた中村先生（今日、地理学教室の主任教授として活躍なさっているとお聞きしています）で、色々ご迷惑をおかけしました。

1964年（昭和39年）の9月、諸先生方に引き連れられて三・四回生全員による鳥取砂丘近くの湖山でのエクスカージョンがあり、農村調査の基本を体験させていただきました。一日の調査が終わって旅館の狭い風呂場で日頃いかめしい先生たちと一緒に身体を洗った光景が湯気で煙ったように懐かしく思い出されます。翌年の3月、当時の三・四回生だけの自主的なグループで高野山下の九度山をフィールドとした数日間泊り込みの農村調査を行いました。その時の参加者の写真をご覧ください。誰の発案かは忘れましたが、早稲田大学で開催されることとなった「第一回全国地理学生大会」にこの調査結果を発表することが目的でした。さて、一同、意気揚々と大学して東上し、斎藤が代表して発表したまでは良かったが、他大学の学生緒君からの鋭い質問の矢にタジタジとなって壇上で立ち往生をしたのも今は懐かしい思い出となりました。

1966年卒業の我々四名は、公・私の別はあれ、全員が教職に就くこととなりましたが、恩師の一人であった藪内先生から「君達は社会に出て通用する有能な学生だから頑張らなさい」との励ましの言葉を頂いて、感激するとともに大変心強く思ったことを憶えています。その後、紆余曲折はありましたが四名とも教職の道を歩み、定年というゴールにたどり着こうとする年齢となりました。

私事で恐縮ですが、カトリック・ミッションスクールの男子校で三十年余り地理を担当してきました。この間、何千人になるのか分からない人数の高校生を相手に、毎年々々繰り返して地理を教えてきたことになります。そして、授業を開始するに当たって常に生徒たちに切り出したことは、「地理とは何か」ということでした。

学生時代から「地理とは何か」が我々の最大のテーマであり、よく議論しました。議論の行き着くところは、ラッツエルの「環境決定論」とブラーシュの「環境可能論」でした。自然と人間の関係について、学生時代の我々を捉えたのは、自然に働きかけ、人類の発展に役立つ可能性を自然から引き出す主人公である人間の役割を主張したブラーシュの学説でした。高校生を相手にした授業でも、この学生時代の体験が延々と今日まで引き継がれてきました。

21世紀を迎えるに当り、環境破壊がますます深刻化して人類の破滅に至るのではないかと不安を抱く若者たちが増えています。人間のエゴをむき出しにした自然破壊はブラーシュの考え及ばなかった事態の進行でした。従って、今まさに自然と人間の関係を大いに議論し、見つめ直すことが求められているのではなかろうか・・・と生徒たちに語りかける昨今です。「学びて、未だ至らず」の感想を述べて、駄文の終わりとします。

（昭和41年卒業）